学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　**中国古典戯曲『琵琶記』テキスト研究**

申 請 者 氏 名　　**張　洋**

『琵琶記』は南戯を代表する作品であり、明代には「南戯の祖」と称された。負心をテーマとする初めての才子佳人劇であることは広く知られている。また、この作品の主題は「忠孝」発揚であり、そのため、帝王や士大夫、庶民を問わず、『琵琶記』を深く愛好したからである。典雅な海鹽腔、崑山腔にしても、粗野な弋陽腔、青陽腔にしても、『琵琶記』は経典的な演目である。役者が歌唱を学ぶ時、『琵琶記』は必修の基本曲目とされた。戯曲作家は創作する時に『琵琶記』を模本としている。この故、晩明に『琵琶記』が大量に出版されたが、各テキストにおいては元来のストーリーが改編されている。本研究では、テキストの差異に基づいて、『琵琶記』の改編について考察を展開しようとするものである。

考察を展開するにあたって、本研究が検討するのは日本と中国に所蔵される明刊本二十三種類である。明代後期から、演劇の流行と出版業の隆盛期が重なり、清代に至るまで数多くの『琵琶記』が出版されたが、それらの継承関係については、まだ不明な点が多い。更に、各テキストの内容が改編された経緯について十分に研究されていない。本研究では、各テキストを比較して、異同点を分析し、各テキストの特徴を整理して、改編の内容を把握し、更に社会状況を考慮しながら、改編の経緯について明らかにしようとするものである。

本論文は序章と終章を含め、六章から構成されている。以下、各章の概略を記す。

本論文中では、『琵琶記』の二十三種類の明刊本から、四種類の刊本を選んで研究対象とした。各章の考察の結果は、以下のとおりである。

第一章では、忠孝伝は陸貽典抄本の内容を襲用し、更に新たな内容を追加する部分が多いことから判断して、古い形を伝える一方で、時本の影響を強く受けた痕跡を残す刊本であることを論じた。先行研究では明らかではなかった忠孝伝と「古本」系統の諸刊本の関係を明確にし、更に忠孝伝と「通行本」系統の刊本を対校し、忠孝伝と陸貽典抄本・巾箱本・凌濛初刻本・汲古閣本との関係を明らかにした。この結果、忠孝伝と凌濛初刻本は同一の系統に属する刊本であることが明らかになった。

第二章は、従来の分類では『琵琶記』諸刊本の関係が必ずしも明確ではないため、十九種の刊本の曲辞・賓白の異同に基づき考察を進め、各刊本間の関係、及び刊本の内容の演変の過程を明らかにした。その結果、第一段階の刊本に始まり、第二段階、第三段階における増改、修訂を経て、第四段階の刊本において本文の内容がようやく定着し、差異が僅少になってきたことが明らかになった。すなわち、第一段階には陸貽典抄本・巾箱本が、第二段階には凌濛初刻本・忠孝伝・富春堂本が、第三段階には唐晟本・継志斎本・集義堂本が、第四段階には南琵琶記[静]本・南琵琶記[国]本・尊生館本・合評本・魏仲雪［台］本・汲古閣本・李卓吾評本・陳継儒評本・硃訂本・袁了凡本が属しているのである。

第三章においては、第二章で総括した刊本の流変に基づいて、魏仲雪[台]本・魏仲雪[北]本の諸刊本における位置づけを明らかにした。魏仲雪[台]本・魏仲雪[北]本の本文は「定着期」のその他の刊本とは異なっており、陸貽典抄本・巾箱本・凌濛初刻本の内容を襲用しているだけではなく、「定着期」の刊本の内容をも継承している。更に魏仲雪[台]本・魏仲雪[北]本は「弋陽腔系」散齣集との関係が最も密接である。すなわち、魏仲雪[台]本・魏仲雪[北]本の本文は多種類の刊本の影響を受け、多様性を有しているのである。

第四章では、『伯皆定本』の眉批の来歴と内容について、諸刊本の襲用、継志斎本の襲用、徐渭『琵琶記』評点本の参照、「呉本」との関係、「俗本」について、「京本」について、「古本」について、「李卓吾」評点本についてという視点から明らかにした。『伯皆定本』の眉批は全六五八条あり、そのうち二二七条は現存刊本に見られる内容である。しかも現存するすべての刊本について言及していることから、該書の出版は諸刊本より遅い。『伯皆定本』の増改定者は他

刊本が示した眉批によって、原作『琵琶記』に「刪、潤、増、改」等の変改を行っている。つまり、増改定者は他刊本の本文の襲用だけではなく、眉批もそのまま踏襲したことが明らかである。

以上を要するに、『琵琶記』諸刊本間の異同を対校することによって、刊本の流伝が明らかになった。刊本と散齣集の内容を比較すると、他声腔の刊本も内容の変容の一因である。また魏仲雪本のように同じ名称を冠するものでは、書賈が利潤を追求して恣意的に内容を変改し、劣悪な刊本が刊行された。これ以外に、刊本の内容の変化に影響した主な原因は、明代文人の格律、曲辞、音韻等に対する不断の探究心に基づくものと考えられる。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 129 号	氏　名	張　洋
論文題目	中国古典戯曲『琵琶記』テキスト研究		

（論文審査概要）

本論文は，「南戯の祖」と称される『琵琶記』刊本の流変に関する研究である。『琵琶記』には実在の人物に擬定される才子佳人の悲歓離合が描かれ，忠孝の発揚を主題とすることから，公卿大夫，庶民を問わず博く愛好された。明末にあっては演劇の流行と出版業の隆盛とが相俟って各種刊本が出版されたが，いずれも作者高明が制作した当初の内容に手が加えられている。そこで日本，中国及び台湾に所蔵される明刊本二十三種類を取り上げ，各刊本を対校して異同を抽出し，それぞれの特徴を整理することによって改変の内容を把握し，更に社会背景を考慮しつつ改変の経緯，様相について明らかにしようとしたものである。本論文は本文の厳密な対校から結論を導き出しており，専ら眉批に基づいた議論を展開する先行研究に比して，着実な行論と言うことができ，高く評価することができる。

本論文は，序章，終章を含めて全六章で構成される。各章の内容は以下のとおりである。

序章においては，『琵琶記』梗概及び作者高明の生平について述べ，現存する刊本について詳述し，先行研究を概括する。

第一章においては，忠孝伝をとりあげる。該書は陸貽典抄本の内容を襲用して古い形を伝えるだけでなく，時本の影響を強く受けた刊本であることを論じている。更に「通行本」系統の凌濛初刻本は同一の系統に属する刊本であることを明らかにしている。

第二章においては，『重校琵琶記』をとりあげる。該書と『琵琶記』諸本とを対校し，『琵琶記』刊本は，第一段階に始まり，第二段階，第三段階における増改，修訂を経て，第四段階において本文の内容がようやく定着してきたことを明らかにしている。すなわち，第一段階には陸貽典抄本・巾箱本が，第二段階には凌濛初刻本・忠孝伝・富春堂本が，第三段階には唐晟本・継志斎本・集義堂本が，第四段階には南琵琶記本・尊生館本・合評本・魏仲雪本・汲古閣本・李卓吾評本・陳継儒評本・硃訂本・袁了凡本が属する。

第三章においては，魏仲雪批点本をとりあげる。前章で分類した第四段階に属する魏仲雪批点本は，「定着期」の刊本と内容が同一であるだけなく，陸貽典抄本・巾箱本・凌濛初刻本をも襲用し，更に「弋陽腔系」散齣集との関係を有することも明らかにした。

第四章においては，伯皆定本をとりあげる。該書の眉批六五八条中二二七条の内容は現存する他の刊本にも見られることから，該書の増改定者は他刊本の眉批に基づいて原作『琵琶記』に「刪，潤，増，改」等の改変を行っていることを明らかにした。

終章においては，『琵琶記』諸刊本の流変を総括する。また，『琵琶記』改変には他声腔の盛行，書賈の利潤追求等の要因が想定されるが，明代文人の格律，曲辞，音韻等に対する不断の探究心が最も大きい影響を及ぼしているとしている。

審査委員会は，上記論文について審査した結果，次のように評価する。

1．創造性

本論文は，明刊本『琵琶記』二十三種類を収集し，各刊本を対校したものである。従来の研究においては言及されていない刊本も収集し，これらを対象に加えての研究は，新規性が高く，『琵琶記』研究への貢献は大きい。よって創造性は優れていると認められる。

2．論理性

本論文は，『琵琶記』刊本間の異同を本文の対校に基づいて分析することにより，各刊本の関係及び改変の過程を明らかにし，その結果，明代において『琵琶記』は四つの段階を経て本文が定着したとの結論に至っている。適正な手続きを踏まえての論証であり，論理性は高いと評価できる。

3．厳格性

日本，中国及び台湾の先行研究を十分に渉猟，咀嚼したうえで，それらの問題点を補う資料を収集し，明代における『琵琶記』刊本の流変を解明している。よって論文としての厳格性は十分に担保されている。

以上を踏まえ，審査委員会における審査委員の合議によって，全体の評価を「達成できている」ものと判断し，論文審査の結果を「合」とする

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）根ヶ山 徹

（氏 名）高木智見

（氏 名）馬 彰

（氏 名）＿＿＿＿＿＿＿＿ 印

（氏 名）＿＿＿＿＿＿＿＿ 印